

葉集を読む

松岡 隆子

湖の面に風あらたまる九月かな

岡 美穂

九月も半ば頃になると残暑もやわらぎ空気もひんやりしてきて、木々を吹く風や水の色が俄に秋らしくなってくる。碧く澄みきった湖を爽涼と吹きわたる風は確かに秋の風だ。九月は夏から秋へと季節の移行がはっきりと分かる月である。〈風あらたまる〉という把握に九月の季節感が格調高く詠まれている。

帰り来て人の名浮かぶねこじやらし 河本 順

以前にも似たような句を見たような気がする。気になってバックナンバールを繰ってみた。令和二年十二月号に〈度忘れに記憶のもどりねこじやらし〉があった。どちらが良いかと聞かれたら迷うところだ。掲句は情景がはっきりしている。町ではったり昔の友人に遇った。親し気に話しかけてくる相手に相槌を打ちながらもどうしても名前が思い出せない、というよくある話。〈度忘れ〉の句の方は情景は曖昧だが、〈度

忘れ〉という言葉を大胆に詠んでいてユニークだ。何方の〈ねこじやらし〉も捨てがたい。

寝返りの嬰に手を貸す居待月 宮田 悦子

赤ん坊の成長段階の第一歩は寝返りだろう。寝返りができるようにになると、「這えば立て立てば歩め」の段階になる。一生懸命寝返りをしようとする赤ん坊を囲んで、「もう少し、もう少し」と励ましている。思わず手を貸してしまうのは祖母心であろう。十八夜の月を待つ間の平和な家族の情景は微笑ましい。

鼓一打一打に秋の深みけり 二木 公子

「ヨオーツ」という掛け声とともにボン、ボン、と鼓を打つ音が響く。その澄んだ音色は深秋の音と言えよう。「コイチダ／イチダニ」と読むと、一打ごとに秋が深くなっていくことが感じ取れる。「鼓一打」の切れが鼓の音の間合を思わせて絶妙だ。「一打一打」のリフレインが効いていることは言うまでもない。

名月を見るためだけの椅子を出す 大庭 安代

今年の十五夜は九月二十一日だった。その日の東京の空は曇っていて月は望めそうもなかった。もしやと思い九時ごろ外に出てみると澄み渡った空に美しい月が上がっていた。

大庭さんは鳥根県の津和野に住んでおられる。津和野の名